新型コロナウイルス感染症の県内発生について

～主に小児の感染例から～

その10

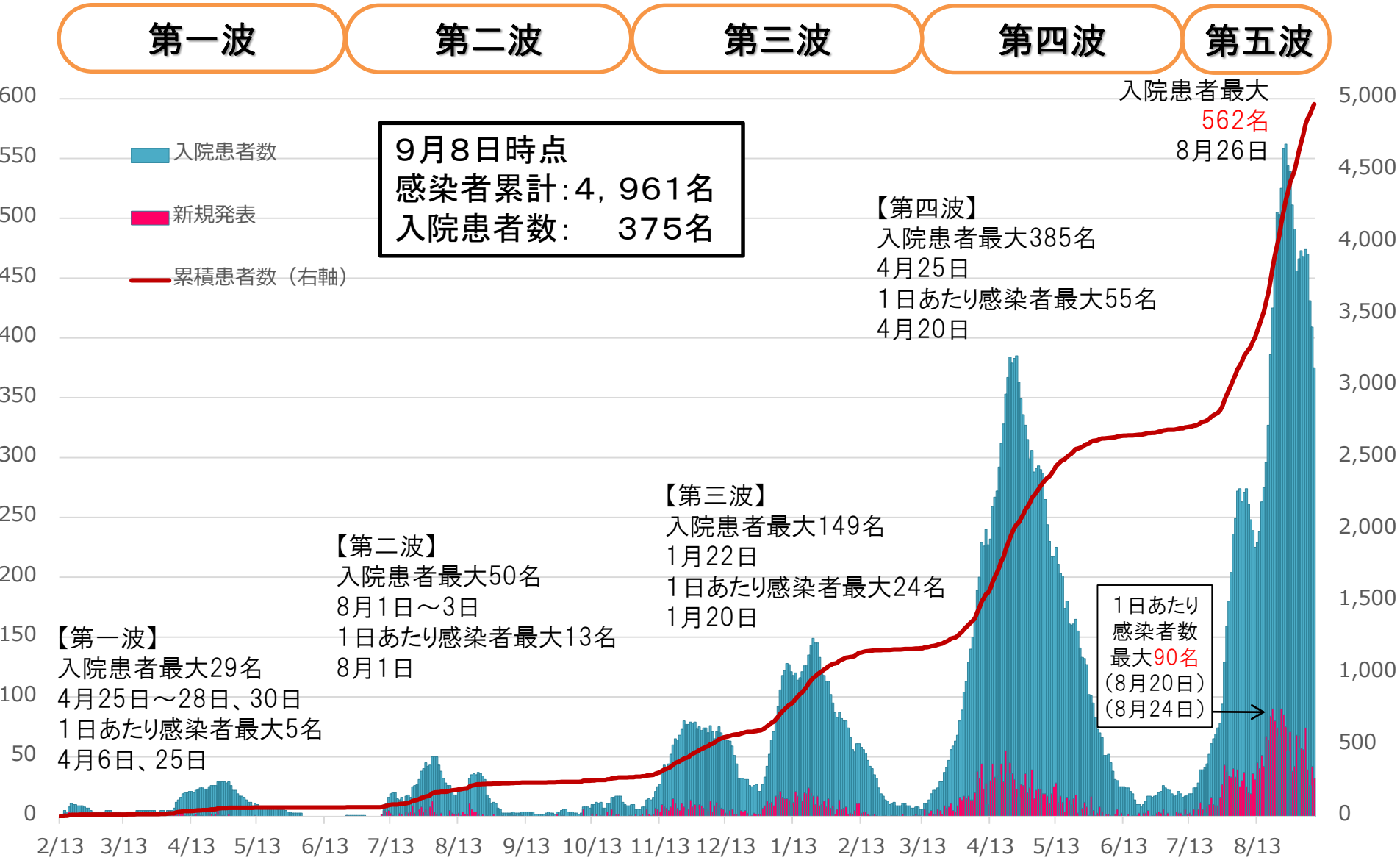
和歌山県福祉保健部技監　野尻　孝子

2021年９月9日

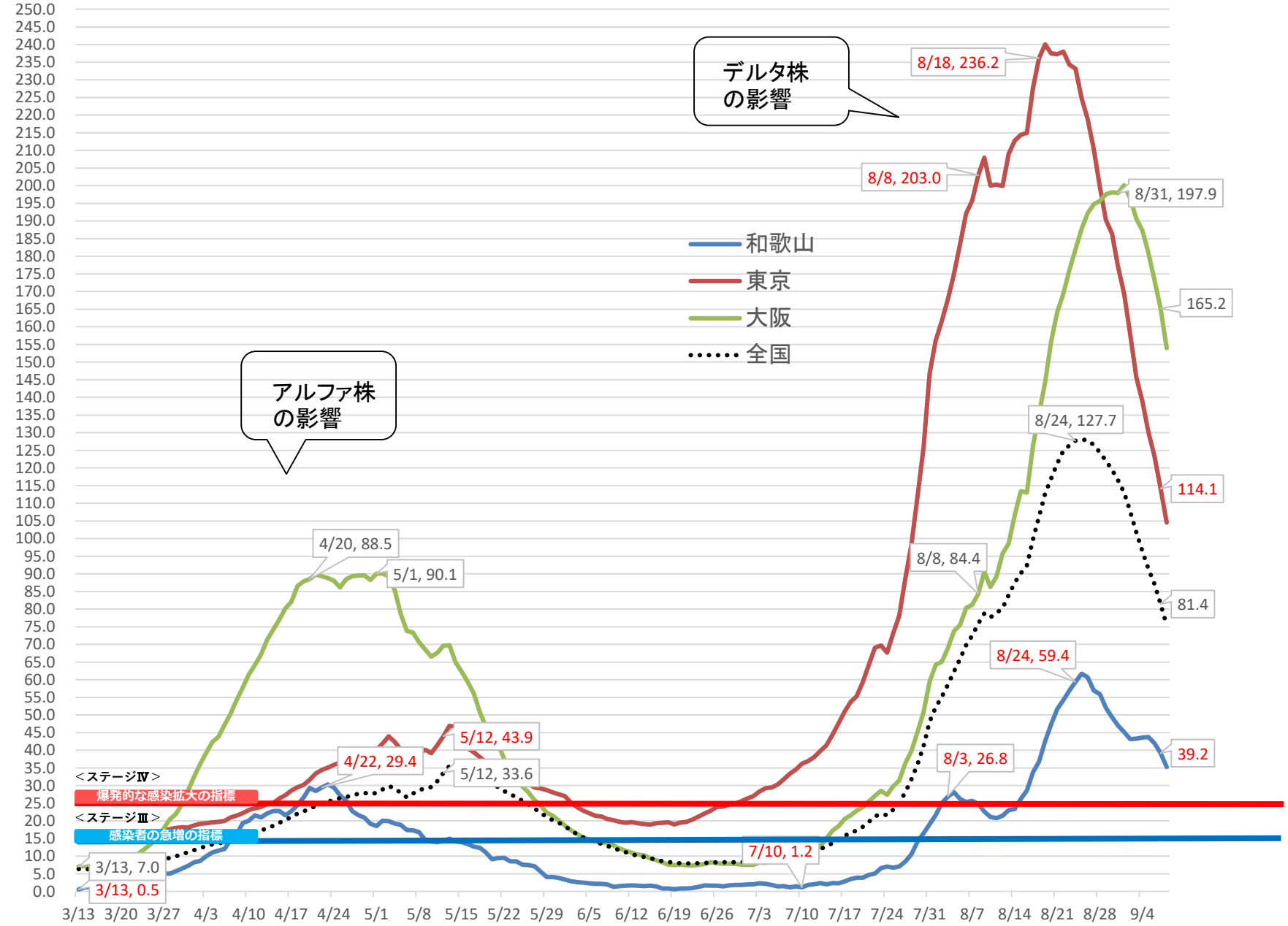
和歌山県
Wakayama Prefecture

和歌山県内の新型コロナウイルス感染症　感染動向の推移

令和3年9月8日
発表分まで



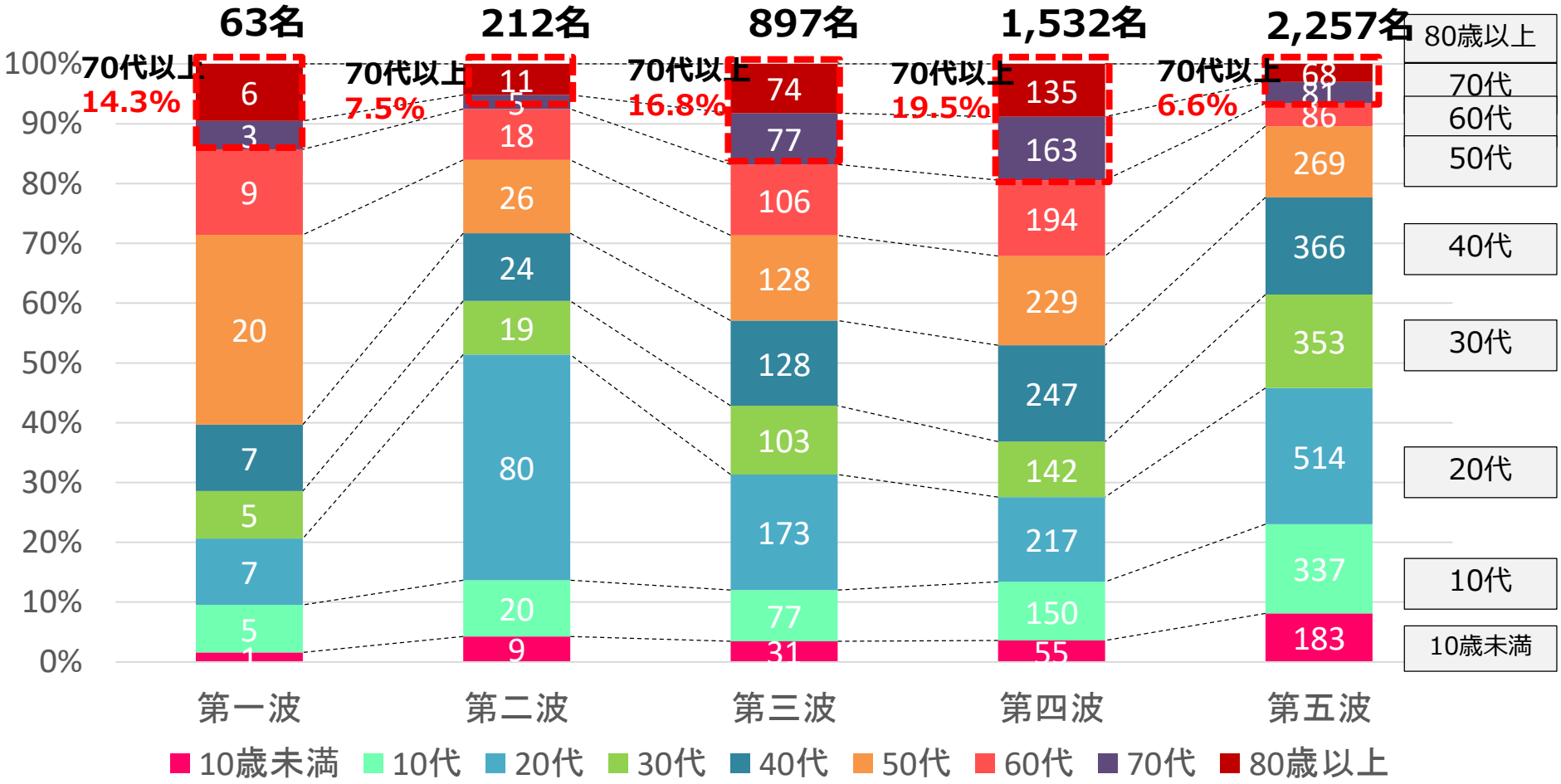
感染動向の推移（全国・東京・大阪・和歌山） 1週間・人口10万人当たり



県内の年齢別感染者数

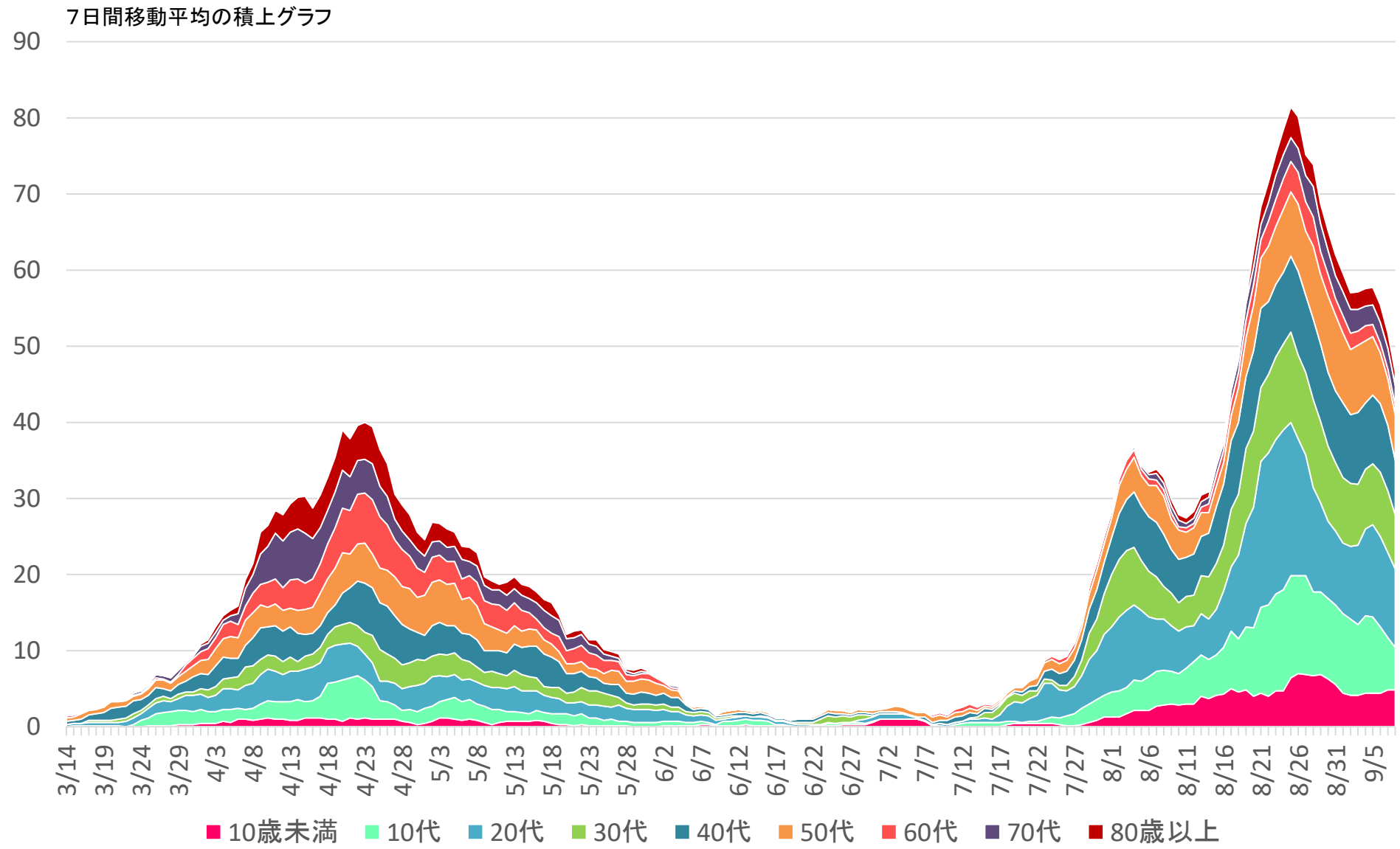
（令和３年９月８日発表分まで）
４，９６１名

○ 第一波では感染者の年代は50・60代が中心であったが、第二波では、20代以下の若者が中心となった。
○ 第三波では、全年齢に感染が広がったが、特に高齢者と小児の患者数が増加している。
○ 第四波においても、各年代に感染が広がるとともに、高齢者の割合が高くなっている。
○ 第五波に入った現時点においては、20代が最も多く、高齢者は少ない。10代以下の若年者・小児が増加した。



県内の第四波以降の年齢別感染者数

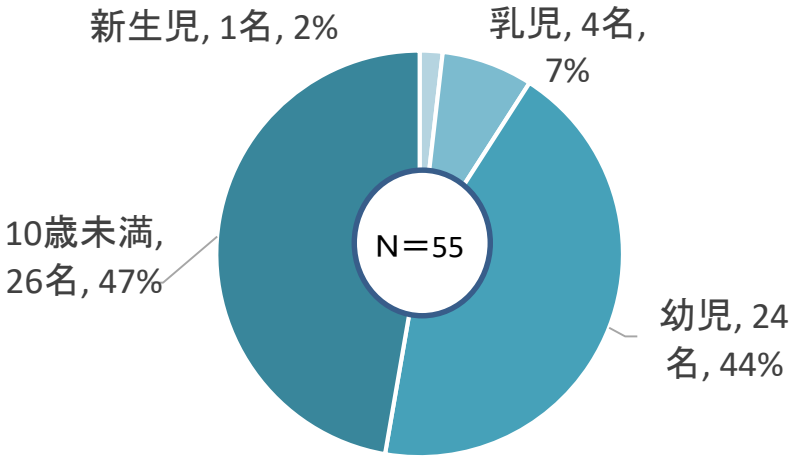
（９月８日発表分まで）
第四波～　３，７８９名



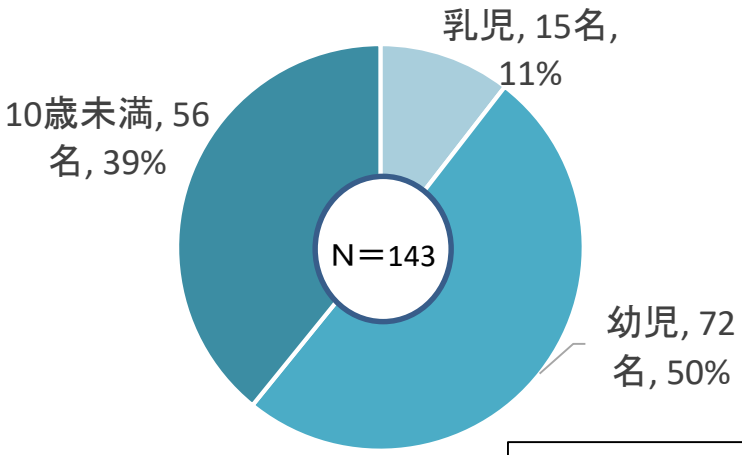
第四波及び第五波の10歳未満陽性者の状況（８月３１日発表分まで）

①年代

【第四波】

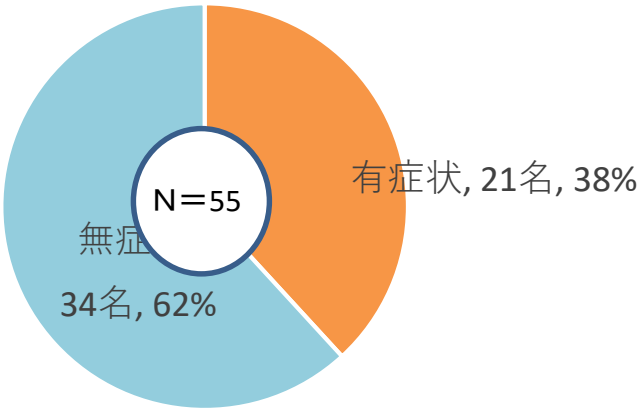


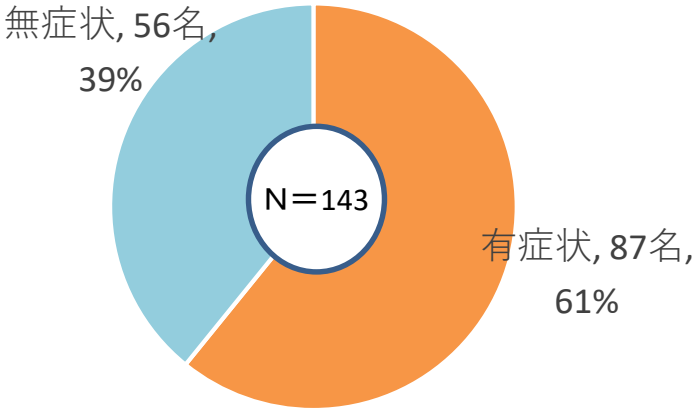
【第五波】



新生児：生後1ヶ月まで
乳児：1歳まで
幼児：未就学児

②陽性判明時の症状

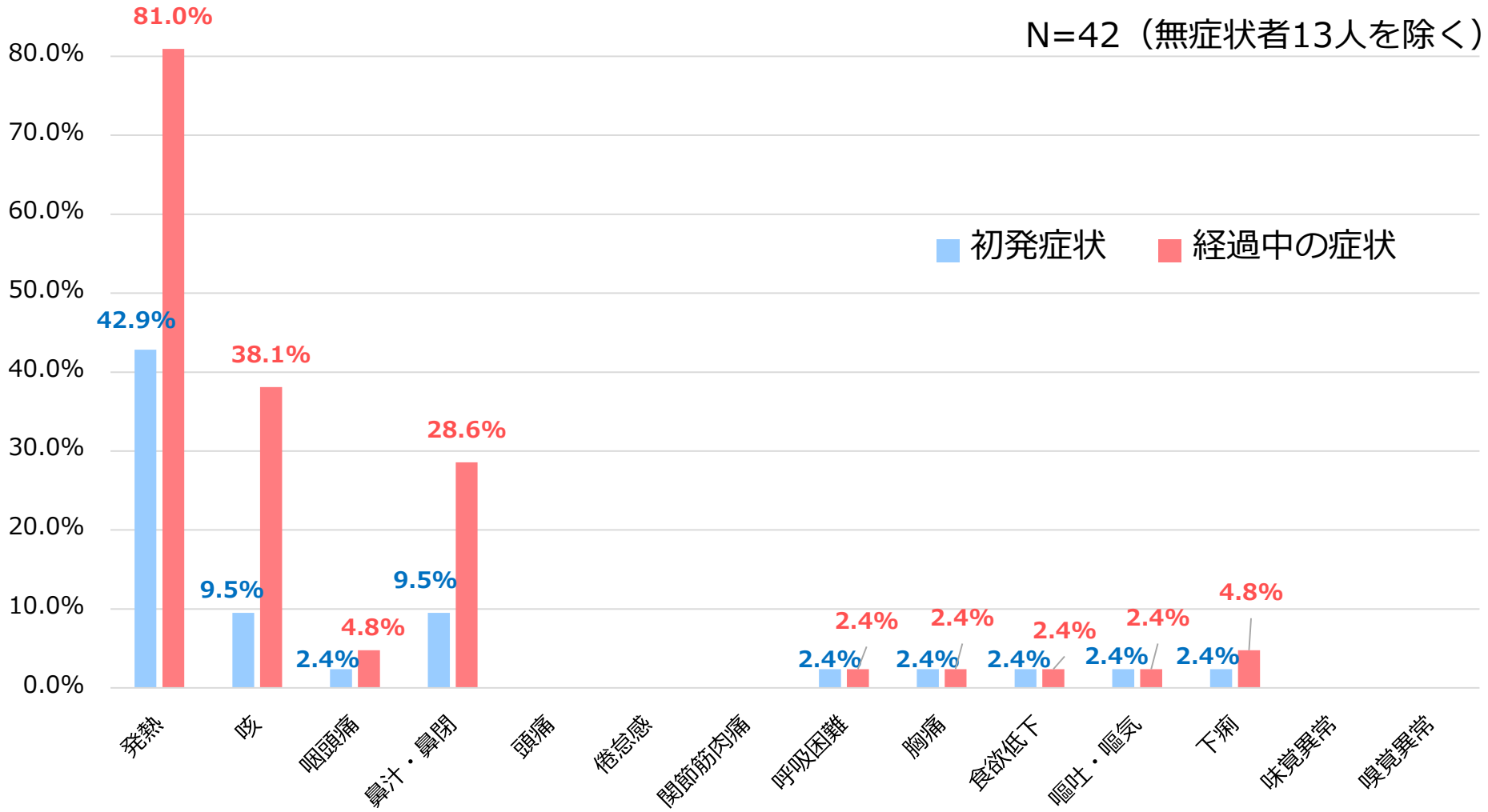




第四波における10歳未満の初発症状と経過中の症状

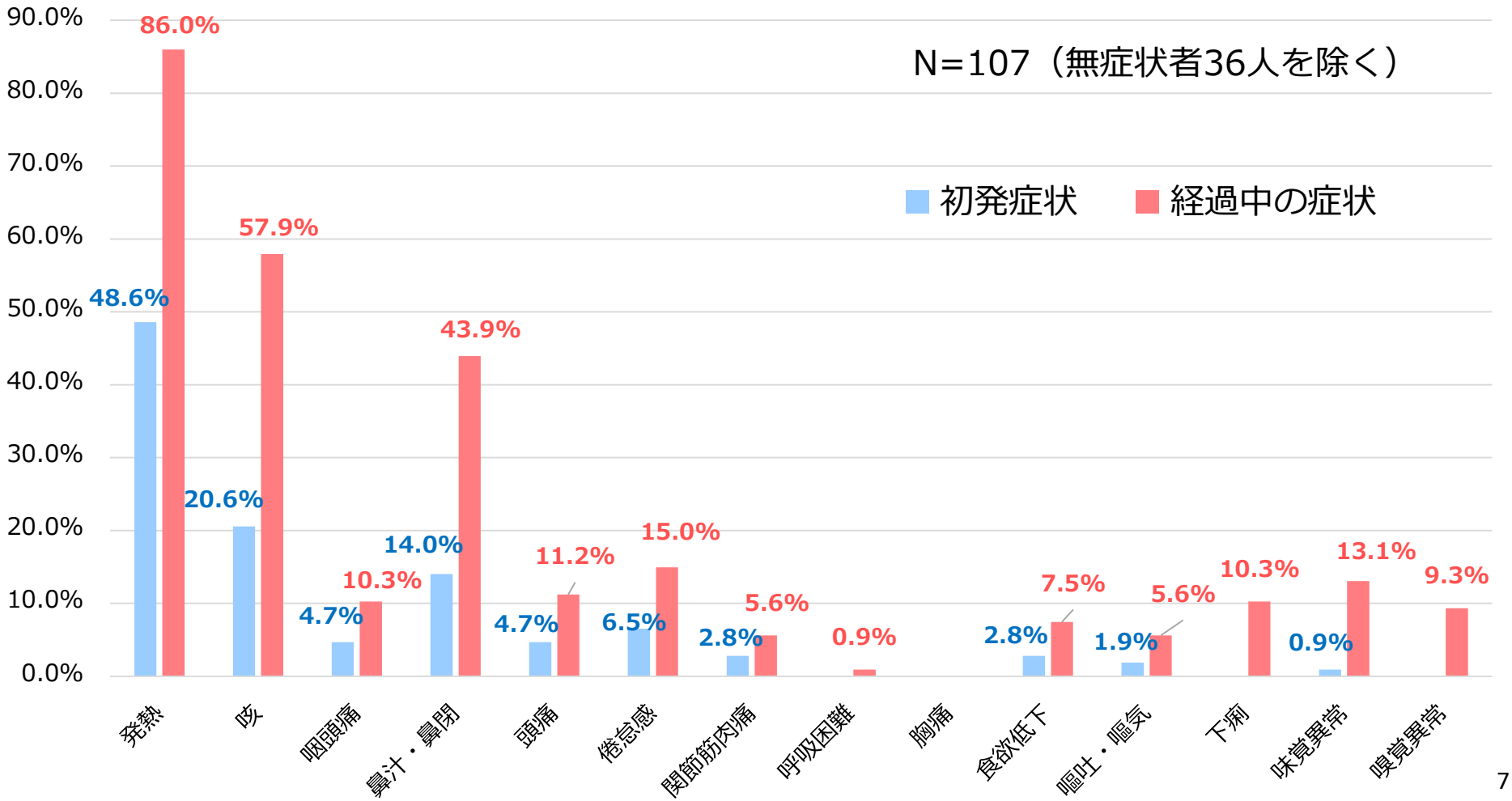
○ 第四波（令和３年3月14日～７月10日）に感染が確認された10歳未満の小児42名の初発症状は発熱が約4割と最も多く、次いで、咳、鼻汁・鼻閉が約10%であり、他に咽頭痛や嘔吐・嘔気、下痢などの消化器症状が見られた。

○ 発症から経過中の症状は、発熱が約8割と最も多く、次いで、咳が約38%、鼻汁・鼻閉が約29%と多く見られた。また、経過中に下痢が約5%に見られた。



第五波における10歳未満の初発症状と経過中の症状

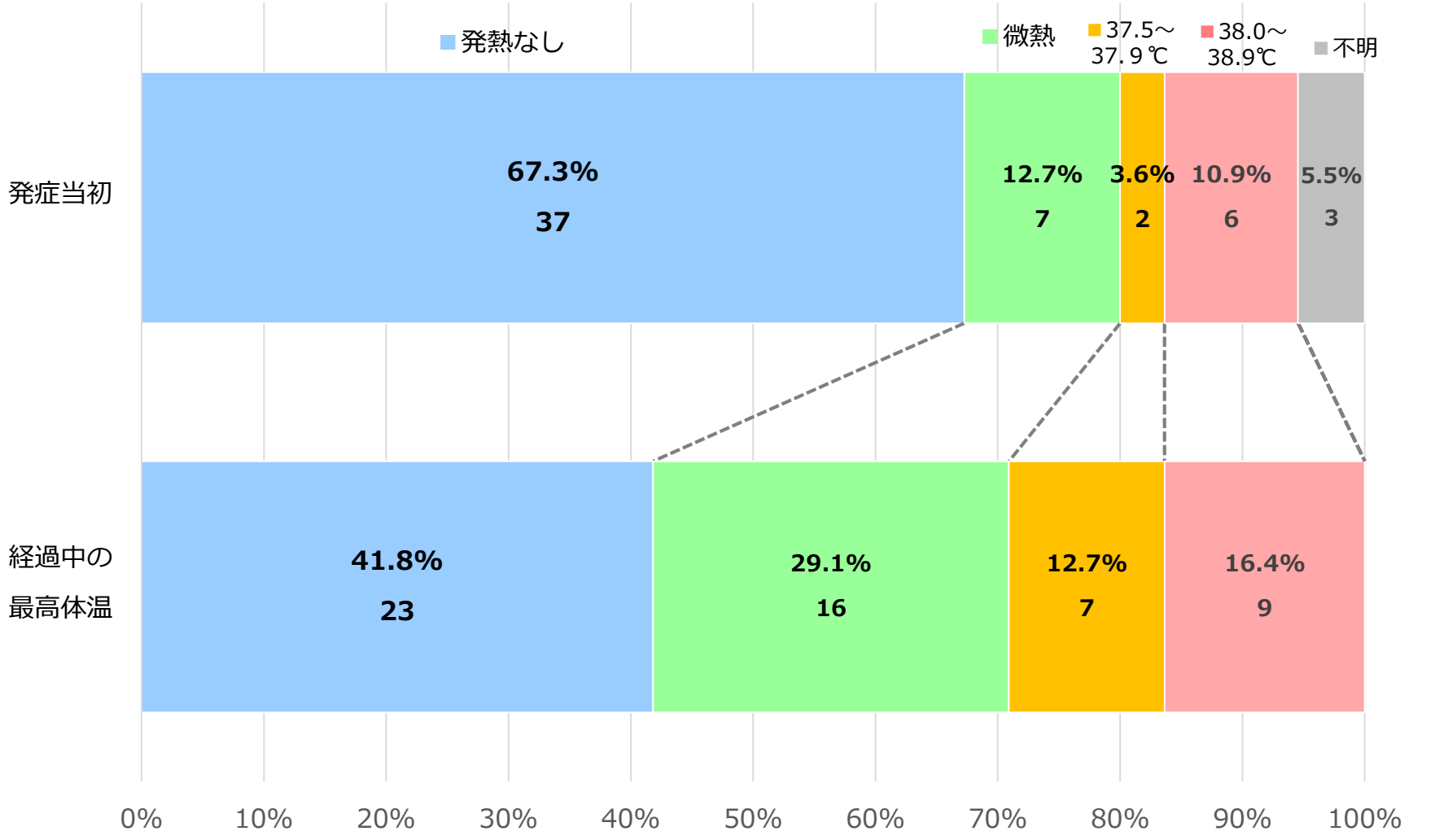
○ 第五波の令和３年7月11日～8月31日における10歳未満の小児107名の初発症状は発熱が最も多く、約49%で、次いで、咳が約21%、鼻汁・鼻閉が約14%、倦怠感 約7%となっているが、咽頭痛、頭痛、関節筋肉痛や食欲低下、嘔吐・嘔気などが数%に見られた。
○ 発症から経過中の症状は、発熱が約86%と多く、咳 約58%、鼻汁・鼻閉 約44%、倦怠感 約15%、頭痛、関節筋肉痛や食欲低下、嘔吐・嘔気、味覚・嗅覚異常が10%前後、呼吸困難もわずかに見られた。
○ 第四波と比較すると、発熱や咳などの上気道炎症状の出現率が高く、また多様な全身症状が見られた。



第四波における10歳未満の発症時の発熱と経過中の最高体温

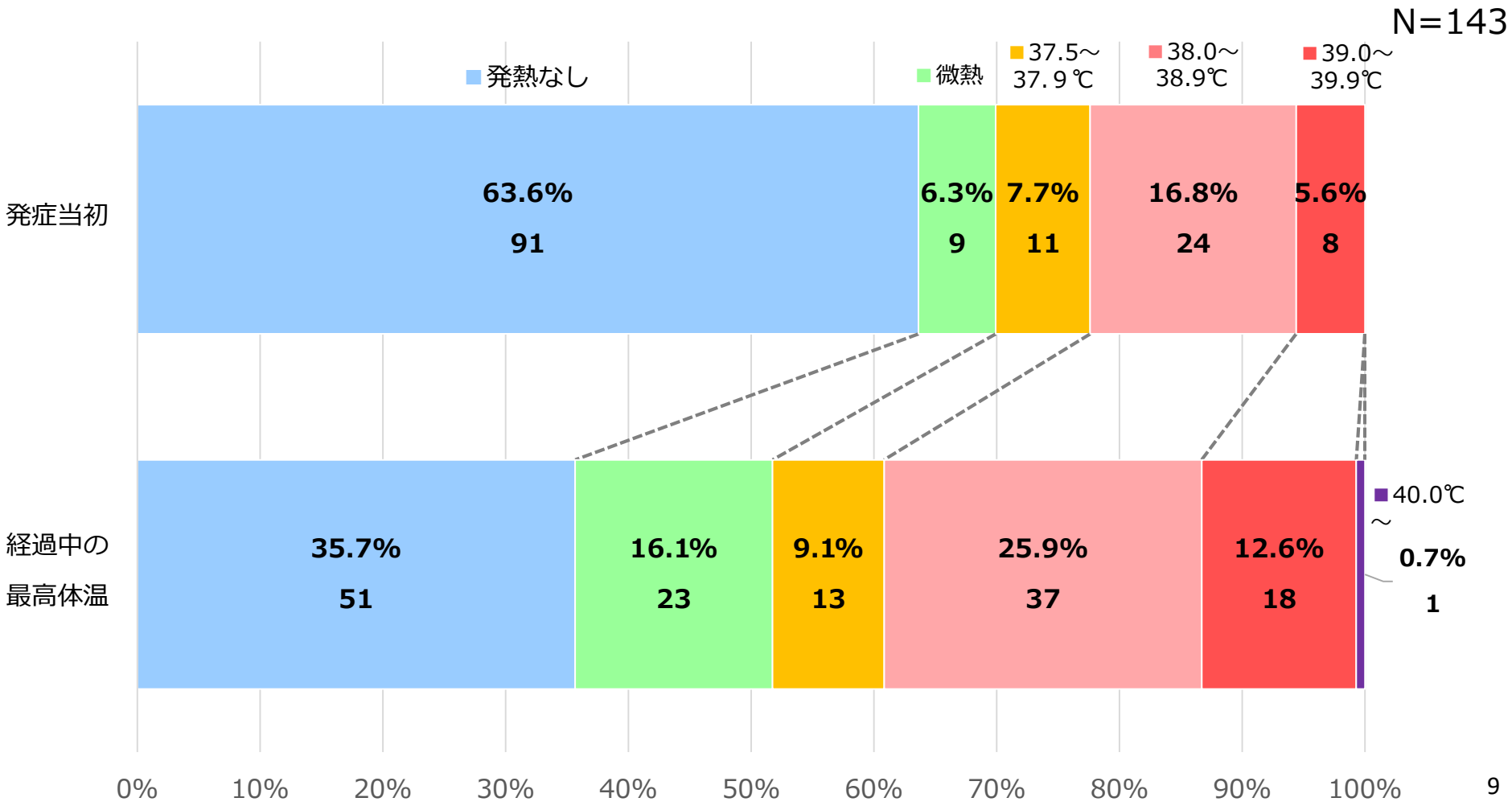
○ 第四波（令和３年3月14日～７月10日）に感染が確認された10歳未満の小児55名の発症当初の体温は、発熱なしが約67%で、38度以上は、約11%であった。なお、発熱しているが、体温が不明が3名あった。
○ 陽性者の経過中の最高体温は、発熱なしが約42%で、38度以上は、約16%となっていた。39度を超える者は確認されなかった。　※有症状者 42名　無症状者 13名

N=55



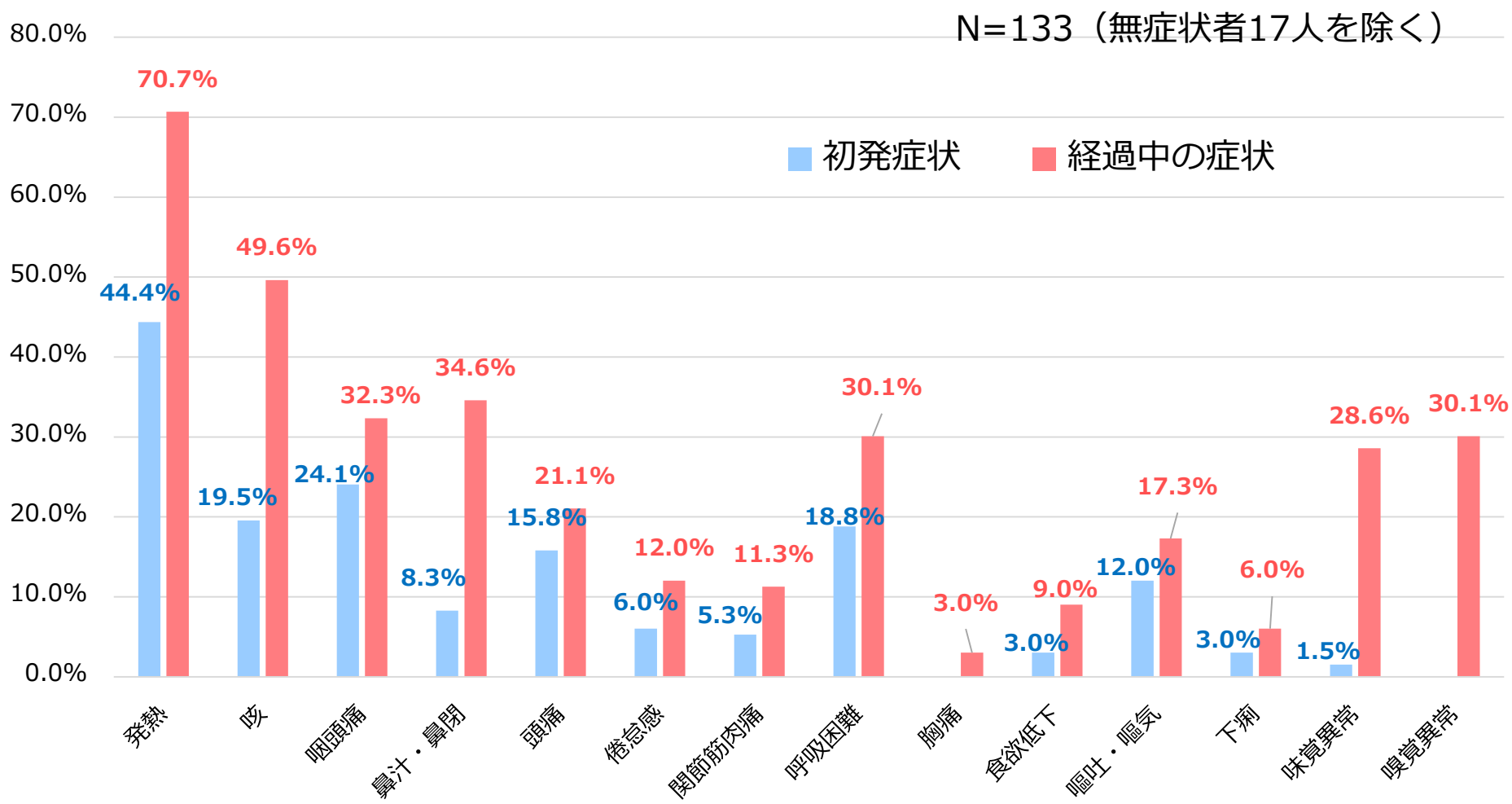
第五波における10歳未満の発症時の発熱と経過中の最高体温

○ 第五波の令和３年7月11日～8月31日までに感染が確認された10歳未満の小児143例の発症当初の体温は、発熱なしが約64%で、38度以上は、約22%で、うち39度以上は約6%あった。
○ 陽性者の経過中の最高体温は、発熱なしが約36%で、38度以上は、約39%で、うち39度台は約13%あった40度以上もわずかにあった。
○ 第五波では、38度以上の発熱者が多く、39度以上の高熱の者が多くなっていた。
※有症状者 107名　無症状者 36名



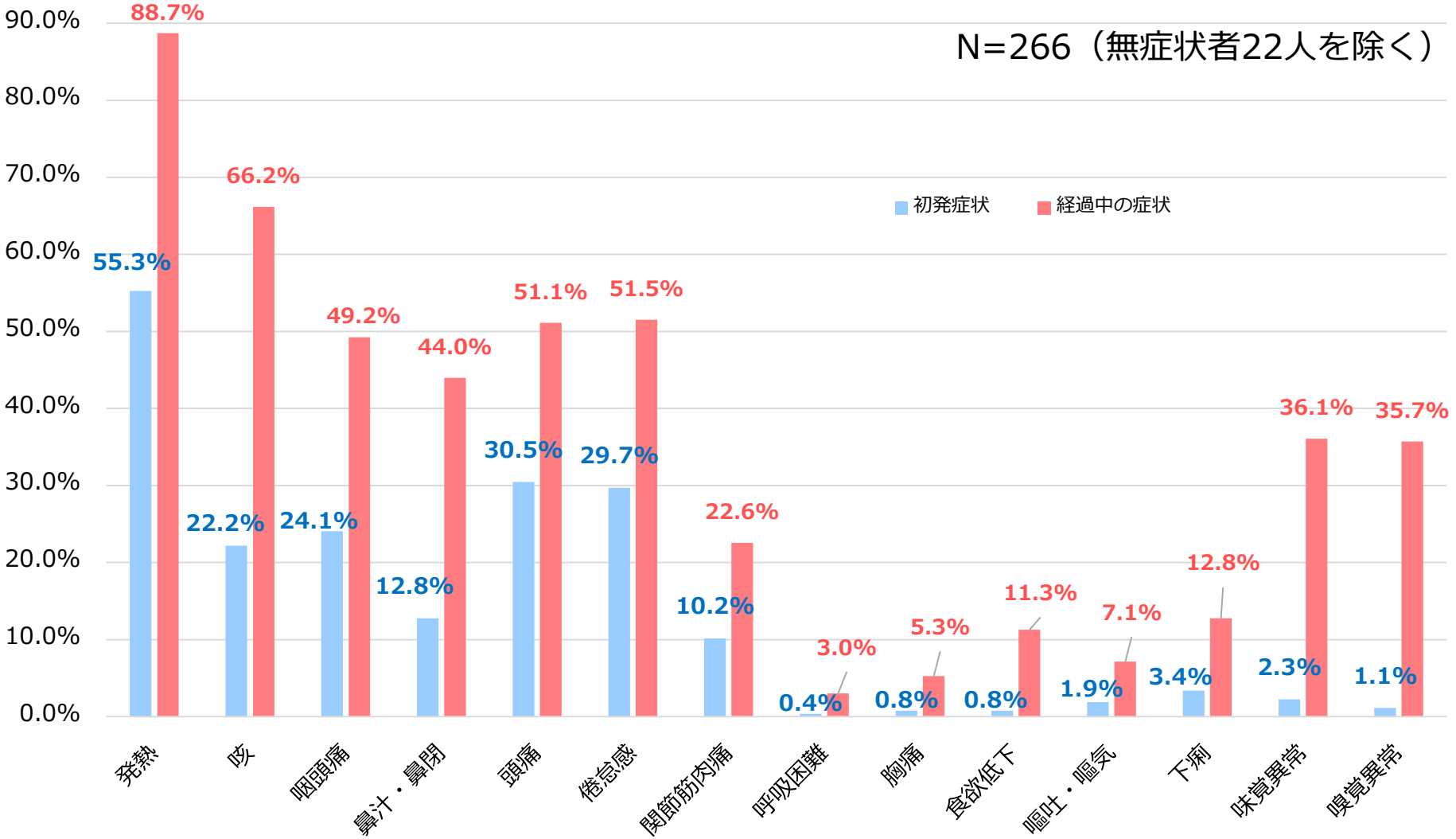
第四波における10代の初発症状と経過中の症状

○ 第四波（令和３年3月14日～７月10日）に感染が確認された10代の133名の初発症状は発熱が約4割と最も多く、次いで、咽頭痛、咳、呼吸困難が約2割であり、他に頭痛、鼻汁・鼻閉や、嘔吐・嘔気、下痢などの消化器症状が見られた。
○ 発症から経過中の症状は、発熱が約70%と最も多く、次いで、咳が約50%、鼻汁・鼻閉が約35%と咽頭痛、呼吸困難や味覚・嗅覚異常が約30%と多く見られた。



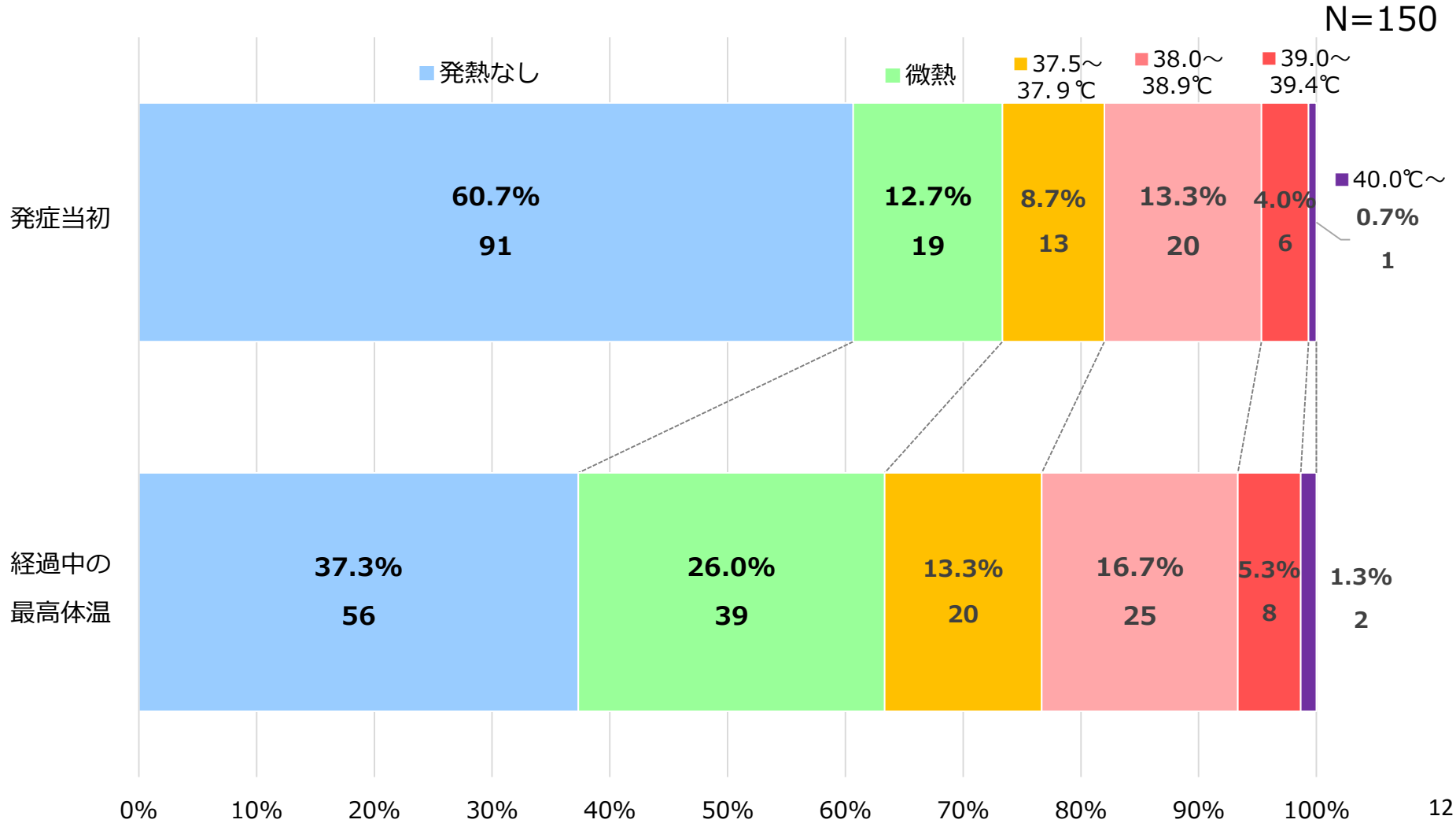
第五波における10代の初発症状と経過中の症状

○ 第五波の令和３年7月11日～8月31日における10代の266名の初発症状は発熱が最も多く、約半数で、次いで、頭痛、倦怠感が約３割、咳、咽頭痛などの上気道炎症状が約２割に見られた。
○ 発症から経過中の症状は、発熱が約９割と多く、咳が約6割、咽頭痛、頭痛、倦怠感が約5割、味覚・嗅覚異常が約3割見られた。
○ 10歳未満と比較すると、咽頭痛、頭痛、倦怠感、関節筋肉痛、味覚・嗅覚異常の症状が多い。



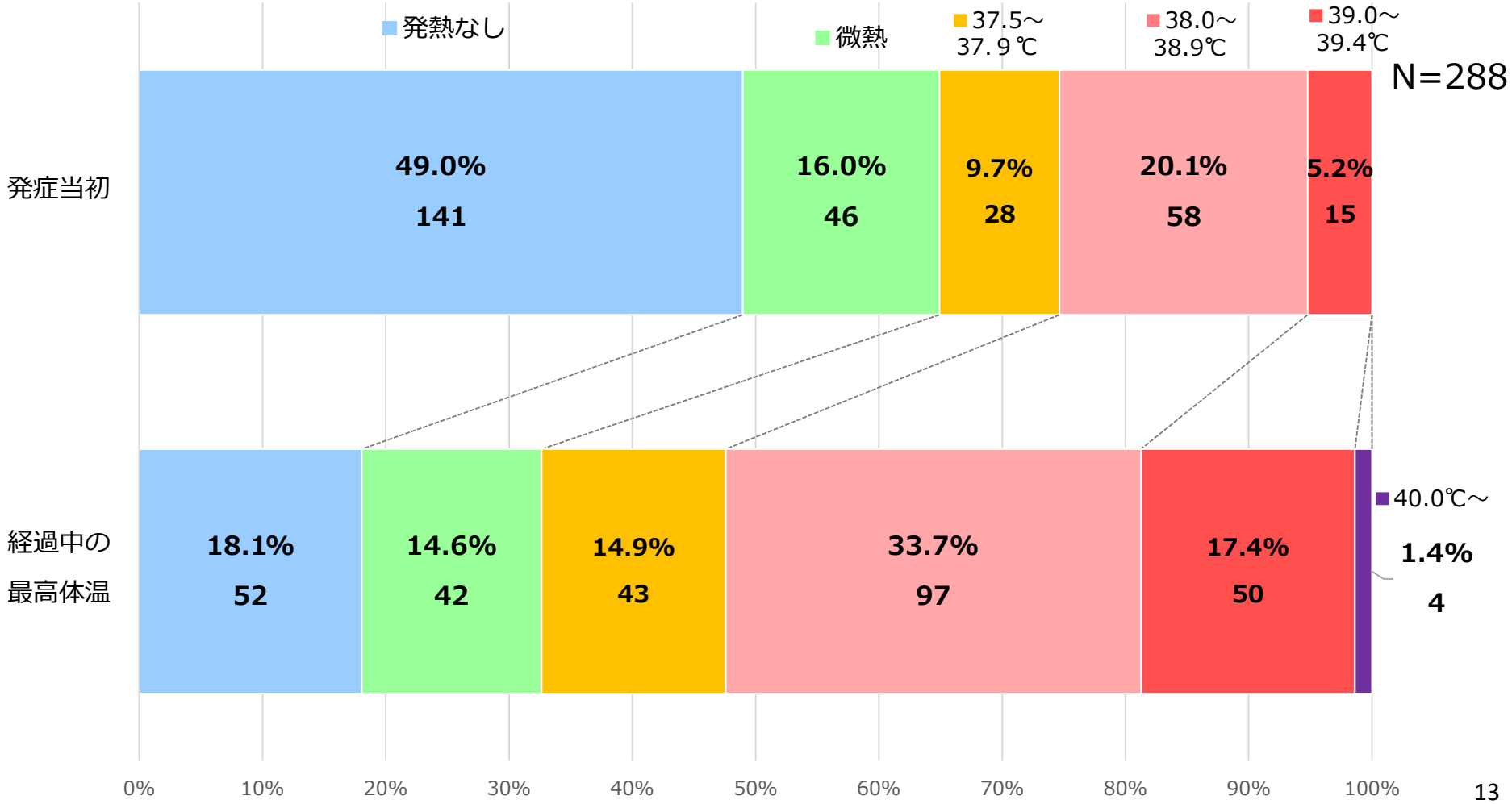
第四波における10代の発症時の発熱と経過中の最高体温

○ 第四波（令和３年3月14日～７月10日）に感染が確認された10代150名の発症当初の体温は、発熱なしが約61%で、38度以上は、約18%であった。
○ 陽性者の経過中の最高体温は、発熱なしが約37%で、38度以上は、約23%となっていた。そのうち39度を超える者は約7%であった。　※有症状者 133名　無症状者 17名



第五波における10代の発症時の発熱と経過中の最高体温

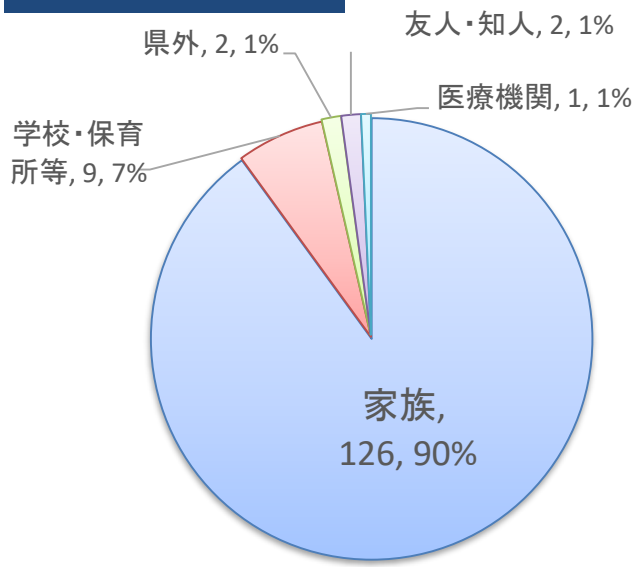
○ 第五波の令和３年7月11日～8月31日までに感染が確認された10代の288名の発症当初の体温は、発熱なしが約49%で、38度以上は、約25%で、うち39度以上は約5%あった。
○ 陽性者の経過中の最高体温は、発熱なしが約18%で、38度以上は、約52%で、うち39度以上は約19%、40度以上もわずかにあった。
○ 第五波では、10歳未満より10代の方が、 38度以上の発熱者が多く、39度以上の高熱の者が多くなっていた。　　※有症状者 266名　無症状者 22名



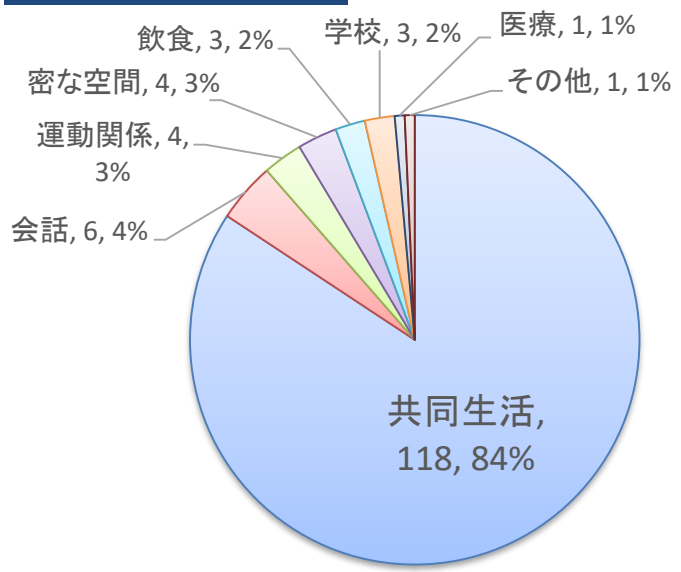
第五波における10歳未満感染者の感染経路推定（7/11～8/31）

令和3年7月11日～8月31日発表分　143件中、感染経路不明3件を除く　**140件**　（県外計上者を除く。）

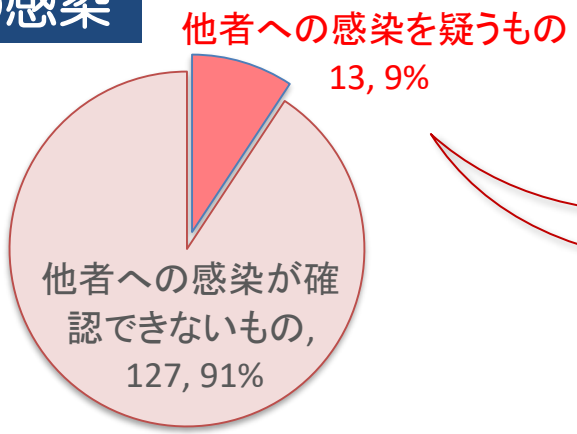
推定感染経路



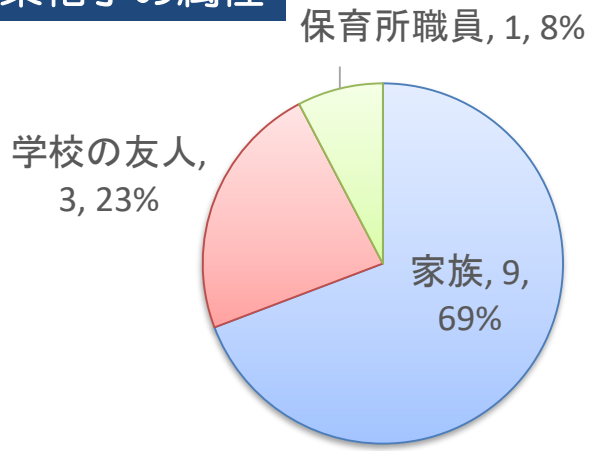
推定感染機会



他者への感染



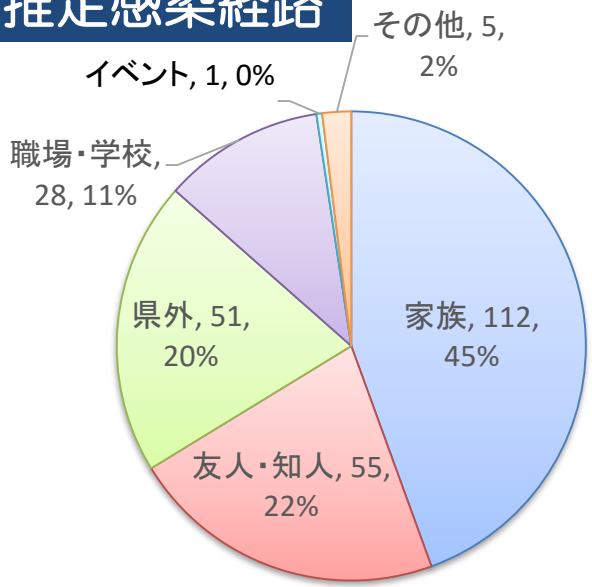
主な感染相手の属性



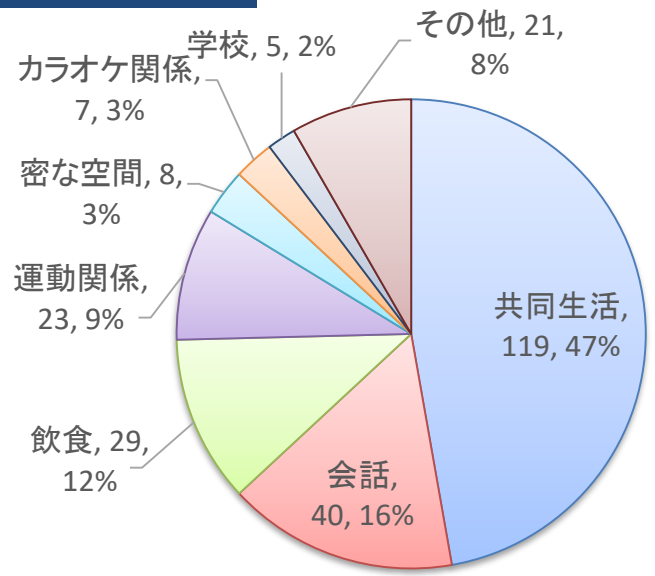
第五波における10代感染者の感染経路推定（7/11～8/31）

令和3年7月11日～8月31日発表分　288件中、感染経路不明36件を除く **252件**（県外計上者を除く。）

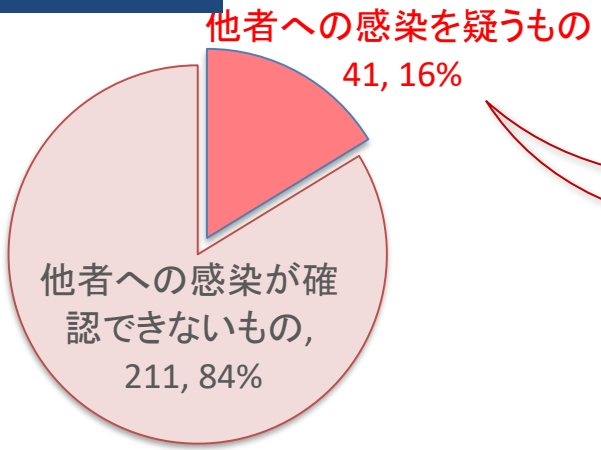
推定感染経路



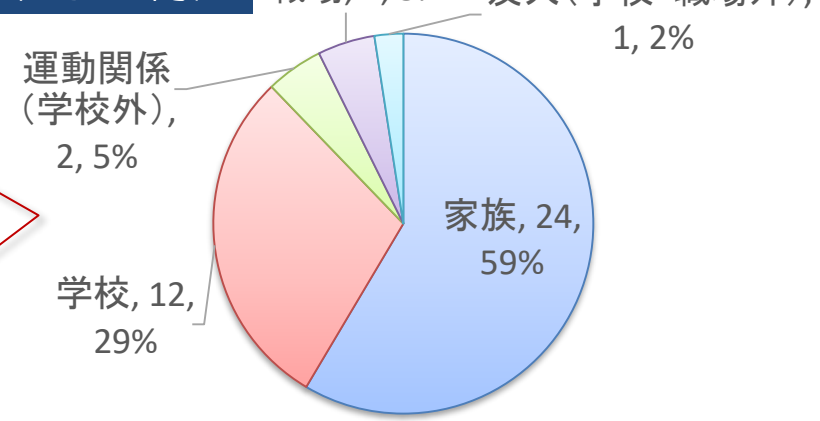
推定感染機会



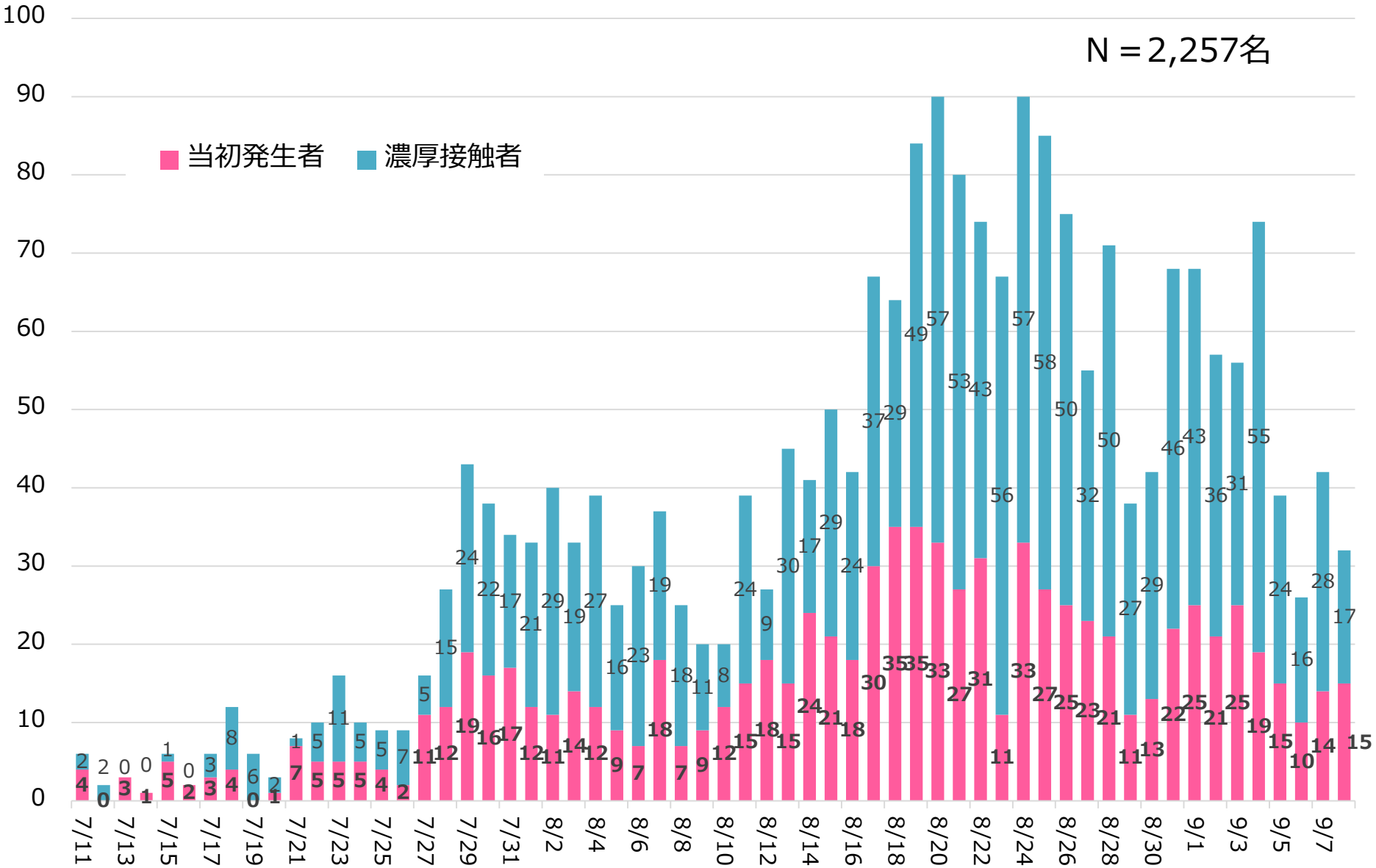
他者への感染



主な感染相手の属性

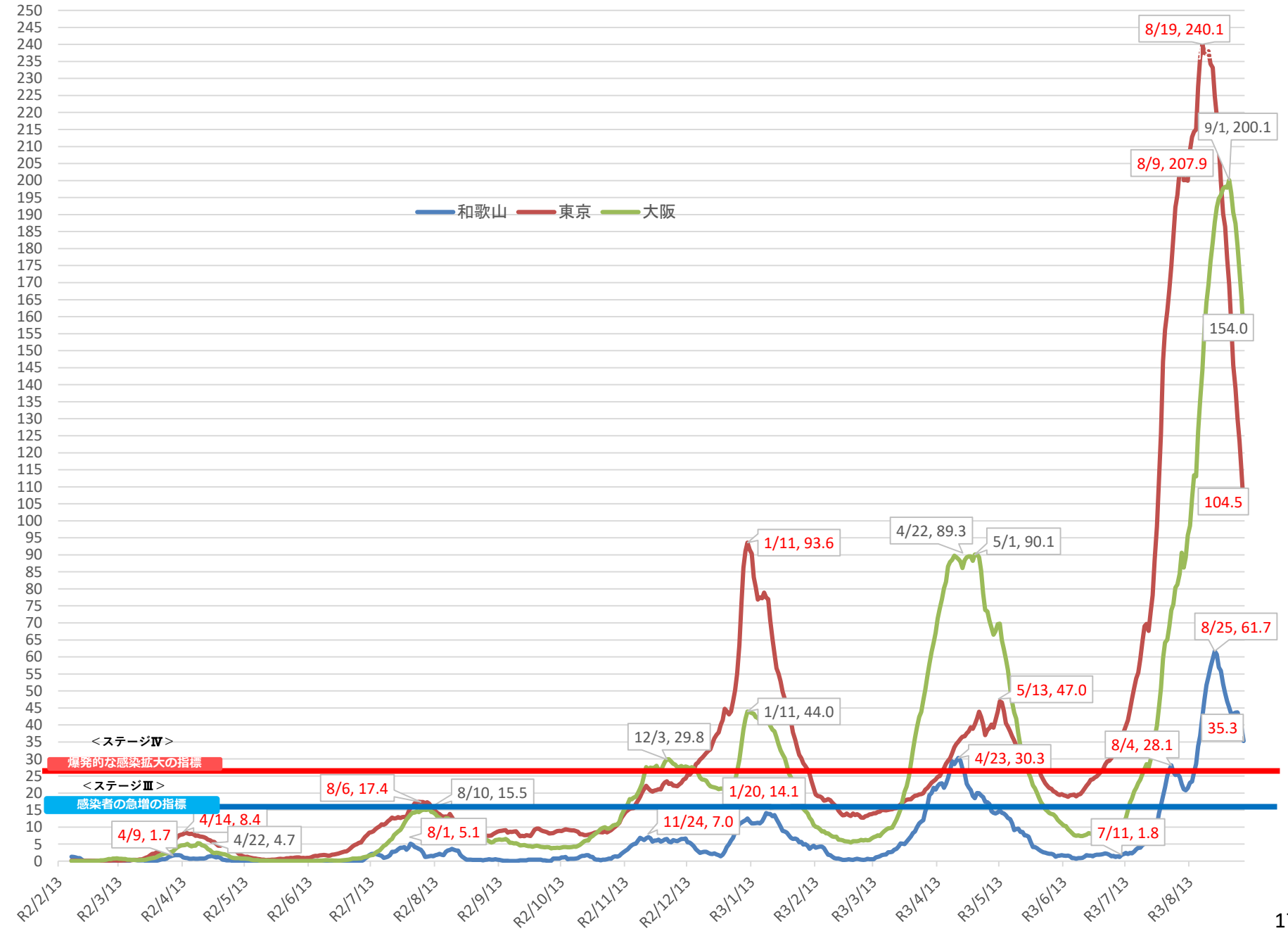


当初発生者と濃厚接触者の推移（第５波　R3.7.11～）



※県外カウント除く

感染動向の推移（東京・大阪・和歌山） 1週間・人口10万人当たり



まとめ

○ 第五波の特色の一つとして、10代以下の若年者・小児の感染が多いことが挙げられる。このため、これらの年代の感染者の症状や感染経路を中心に分析し、今後の対応に活かす目的でまとめた。

○ 第五波では、関東地域から感染拡大したデルタ株の感染が関西にも伝播し、本県でもこのデルタ株の影響によりこれまでにない感染拡大が起こった。デルタ株はウイルスの増殖が速く感染力が強いことから、10代以下の若年者・小児の感染者が増えたと考えられる。また、ほとんどの者が新型コロナワクチン未接種であることも影響していると考える。

○ 第五波では、第四波と比較して幼児など年少の子供の陽性者の割合が高く、陽性判明時に有症状である者の割合も高い。

○ 第五波では、10歳未満の初発症状は発熱が約半数であるが、経過中には約９割が発熱し、最高体温も38度以上の高熱の者が約4割と多くなっている。また、咳、鼻汁・鼻閉などの上気道炎症状とともに消化器症状や全身倦怠感、味覚・嗅覚異常など多様な症状が見られた。

○ 10代の初発症状は、10歳未満と比較して咽頭痛、頭痛、倦怠感が多く見られた。また、経過中に咳、などの上気道炎症状や関節筋肉痛や味覚・嗅覚異常が多く見られた。さらに、経過中に発熱する者も多く、最高体温も高くなっていた。第四波と比較すると、症状の出現率は、高かったが、呼吸困難感は第四波より少なかった。その原因については、今後も観察が必要である。

○ 感染経路の推定では、 10歳未満では、家族からが最も多いが、学校や保育所での感染も見られた。一方、子供から家族、友人、保育所の職員への二次感染が疑われる事例もあった。
10代では、感染経路も多様になっているが、家族からが最も多い。一方、感染者から家族、学校、運動クラブ、友人等への二次感染が疑われる事例もあった。

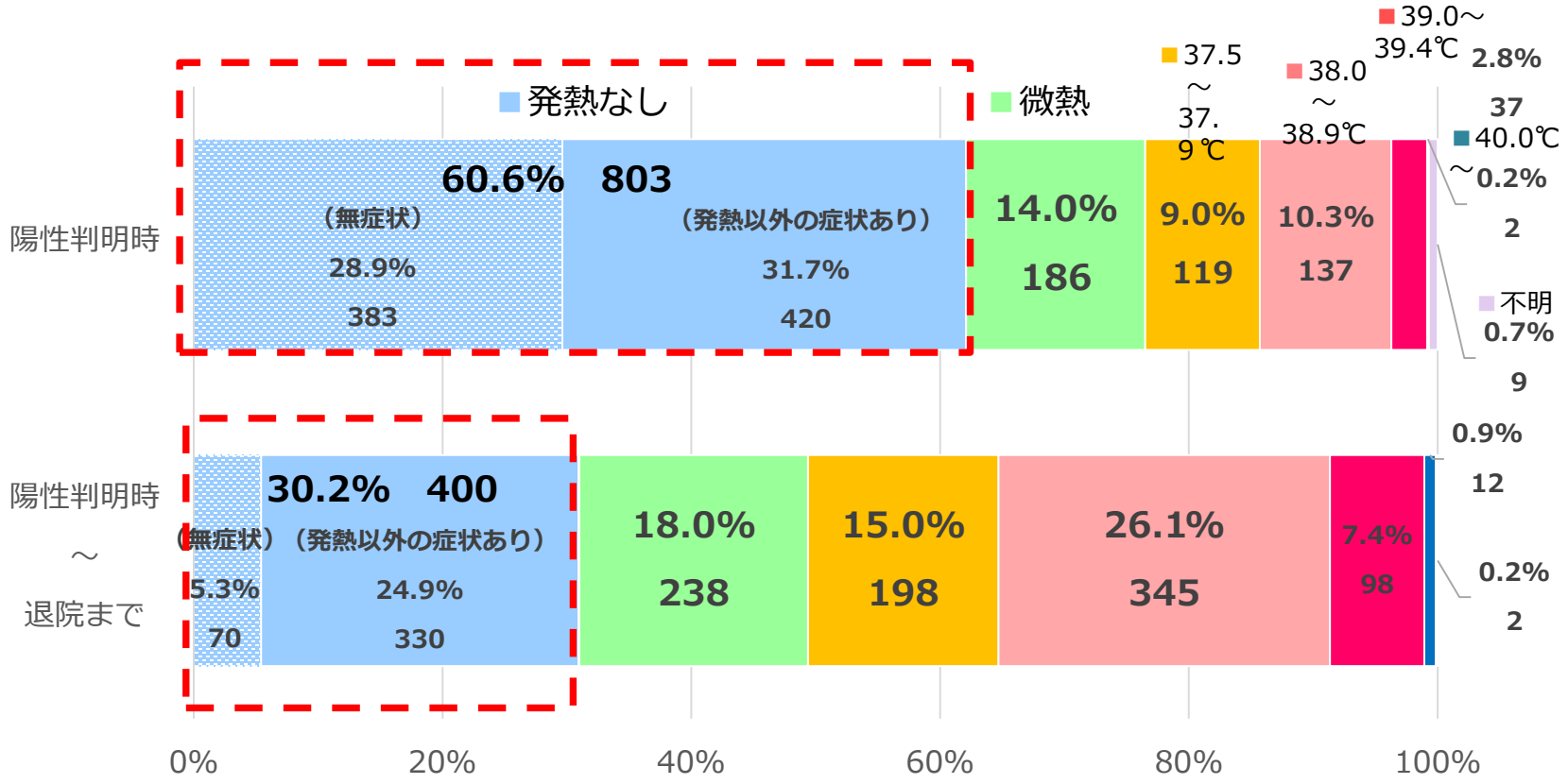
○ 令和3年9月9日現在、第五波の感染者のピークは過ぎて減少に転じてきているが、大人から小児に感染し、小児の集団感染が発生する可能性も高く、また子供から周りに感染させることも確認されており、特に集団生活を行う施設では、一層の感染予防対策の徹底が重要である。

○ デルタ株の感染によると思われる感染者では、高熱で消化器症状や全身症状を伴う事例が多いことから小児の感染者がさらに増加すれば、時間外受診や救急医療への影響も考えられる。

○ ワクチンの接種対象外でマスク着用も不十分な小児では、今後秋から冬にかけてインフルエンザと同時流行もありうることから、検査体制や医療体制の充実が必要と考える。

参考

新型コロナウイルス感染者の最高体温

※退院患者（R3.3.14～R3.5.31）N=1293

○　陽性判明時には、発熱が無い人が60.6%であり、微熱の人も入れると76.5%であった。
○　経過中には、症状が出て発熱する人が増えたが、37.5度以上は50.7%で、38度以上は35.3%であった。また、入院中も含め、発熱がない人は30.2%であった。